



大塚哲也著 写真で見る作業療法の実践

大塚哲也先生の最近の著書で作業療法を平易に読み易く述べたものである。大塚先生は平素より多くの優れた著書を出されているが運動療法に続いて書かれたものと思う。いずれにしても先生の青年の様なエネルギーに満ちた勉強熱心な態度は我々若輩にとって大いに励みになるものである。

書名に示される様に352頁にも及ぶ本書の約半分が写真に割かれていることが、まず第一の特徴である。OTに必要な機械から、OTの実践面にわたってまで詳しく説明がなされ、本文と合せ読むと非常に理解し易い。図表がふんだんに取り入れられているのも有難い。そうした点ではOTRには勿論、OTの知識に乏しい関連分野のスタッフに格好な入門書とも言えるが、専門書としても十二分に活用されるものである事は言うまでもない。

一般病院ではOTRの不足や、OTの設備が整っていないためか、PTの段階までしか及ばず、更に一步という点で足踏みしている状態が多い。また実施に当り、PT、OTが必要と思われても、さてどの様にしたらよい

のか、どの様なプログラムを組むのか戸惑うことも多いものである。本書では、個々の疾患についてのOT、PT（付録として）のプログラムが組まれており、その相互の関連性、必要性が説かれている。そのcaseにより適宜組み替え削除すればよいのであるから、我々にとっては非常に便利であり、親切な書物と言わねばならない。

とかく見過し易い患者の心理状態を適確に捕えることが、いかに大切であるかを全文にわたって強調されている点は、多くの患者に熱心に取り組まれて来られた先生の苦勞の程が伺え、特に敬服させられる。

またリハビリテーション医学には、それに携わるスタッフ間の協調性が大切なことは言うまでもない。そのためにはある程度の他の分野についての知識が必要となる。そういう意味でRTP、OTR、医師のみでなく、ソーシャルワーカー、心理判定員、装具製作者等にも一読の価値のある書物と言える。

(医学書院、366頁、8,000円、1974)

(自治医科大学整形外科、医師 大井淑雄)

Physical Therapy Services in the Developmental Disabilities

Edited by P. H. Pearson, C. E. Williams

リハビリテーション医学のシステムや技術にも数式・機械化を中心とするアメリカ的なものと、文章記述や職人的技術を中心とするヨーロッパ的な方法があり、それぞれの違いがおもしろい。広大なアメリカ大陸では画一的な評価や技術がどうしても必要であろう。徒手筋力検査法もまさにそういったアメリカ的背景から発展したすぐれた評価法技術である。しかし最近では米国でも脳性まひなどの中枢神経系疾患に対する治療の最善策が真剣に模索されている。米国のリハビリテーション医と理学療法士の2人がまとめたこの本は、まさに整形外科的アプローチからの脱脚をねらい、また発達障害における理学療法士の仕事の広さと深さを認識させようという意図がはっきりうかがわれる。10章からなる論文は3部にまとめられているが、管理 (management)、治療法 (therapies)、計画 (programs) と網羅されている。なかで

も第2部における治療法にはBobath法、Rood法、PNF法を三大理学療法体系として詳細に述べられてある。Karel BobathとBerta Bobathが直接にまとめたBobath法は、これまでの彼らの仕事の集大成というべきもので、これから新しくBobath法を勉強しようとする者にとっても順序よく理解でき、またBobath法実践者にとってもよき教科書となる。なお三大理学療法とともにスイスの言語療法士Muellerの食事動作促進と言語前 (Facilitating Feeding and Prespeech) 訓練法は、理学療法士がCPセラピストとして成長するのに、具体的な技術習得をも可能ならしめている。そして、発達障害児に対するアプローチはまさに全体的な人間発達の同時進行を具体化していく事にあると、強く訴えている。

(Thomas、504ページ、6,930円、1972)

(聖母整肢園、理学療法士 紀伊克昌)